令和5年度第2回　仙台市総合教育会議　議事録

日　時　　令和6年2月8日（木）18：00～19：20

場　所　　仙台市役所本庁舎8階　第1委員会室

出席者　　仙台市長　　郡　　和　子

仙台市教育委員会　委員　　花　渕　　浩　司
仙台市教育委員会　委員　　川　又　　政　征
仙台市教育委員会　委員　　後　藤　　由起子
仙台市教育委員会　委員　　山　田　　理　恵
仙台市教育委員会　委員　　庄　司　　弘　美
仙台市教育委員会　委員　　長谷川　　真　里

次　第

１．開会

２．協議

・確かな学力の育成について

３．その他

４．閉会

１　開　　会

○事務局　ただいまより令和５年度第２回仙台市総合教育会議を開会いたします。初めに、福田教育長でございますが、本日体調不良のため欠席となりますので、よろしくお願いいたします。それでは、この会議を招集いたしました市長よりご挨拶申し上げます。

○郡市長　皆様、お忙しい中、今年度２回目の総合教育会議にご出席賜りまして誠にありがとうございます。まず、長谷川委員におかれましては、就任後初めての参加ということになりますけれども、どうぞよろしくお願い申し上げます。

前回８月の会議では、不登校児童生徒に対する支援や今後の教育施策全般について、皆様方から多岐にわたるとてもいいお話を聞かせていただいたところでございます。本当にありがとうございました。

今回は、「確かな学力の育成について」を協議題といたしまして、この場を設けさせていただきました。今年度から「仙台市確かな学力育成プラン２０２３」がスタートしたところでございます。本市の子どもたちがたくましく生きる力を育み、そして確かな学力の充実につなげていくために、今後どのような点に力を入れていくべきなのか、どのように取り組んでいくべきなのか、委員の皆様方に幅広くご意見いただければと考えているところです。では、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局　それでは、早速でございますが、協議に入りたいと存じます。以降の進行につきましては市長にお願いいたします。

○郡市長　まず、本日の会議の議事録についてでございますけれども、教育委員会側の署名委員として、後藤委員にお願いをさせていただきます。

２　協　　議

（１）確かな学力の育成について

○郡市長　では、協議に入らせていただきます。今日の協議題は、「確かな学力の育成について」でございます。まず、副教育長から資料に基づいてご説明をお願いいたします。

○岩城副教育長　「仙台市確かな学力育成プラン２０２３」につきましては、昨年度、教育委員会の場でも委員の皆様にご審議いただきました。市長からお話しがあったとおり、改定したプランに基づきまして取組を進めているところでございます。本市における確かな学力の育成について、基本的な考え方や取組の方向性を説明させていただきます。

「第１章　本プラン策定について」でございます。本プランは、「仙台市教育構想２

０２１」を上位計画といたしまして、学習指導要領に示されている視点や、本市の児童生徒の現状を踏まえながら、令和５年度から５年間の「確かな学力」の向上に向けた教育施策の方向性を示したものでございます。

「第２章　学力をめぐる現状と課題」でございます。少子高齢化、急速な技術革新やグローバル化の進展に加えまして、新型コロナウイルス感染症を踏まえた生活・行動様式の変化など、社会の変化が加速する中で、教育を取り巻く環境も大きく動いているものと認識しております。

そのような環境下における本市の児童生徒の学力・生活習慣等の現状でございますが、この資料中段の左側の棒グラフをまずご覧ください。このグラフは、令和４年度の全国学力調査における小学６年生の算数と、中学校３年生の数学の学力層の割合の変化を示しております。全国を「１」としたときの本市の学力層の割合を示しております。学力層とは、正答数の多い順に学力層Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと４段階に分けているものです。このグラフから、本市の小学６年生は全国とほぼ同等、中学３年生は正答数が多いＡ、Ｂ層の割合が高くなっております。今後は、Ｃ、Ｄ層の割合を減少させていくこと、Ａ、Ｂ層を高めていくことが大事だと思っております。

続いて、その横の部分、折れ線グラフをご覧ください。上の折れ線グラフは、仙台市生活・学習状況調査における「自分には、良いところがあると思う」と回答した児童生徒の割合を年度ごと、学年ごとに比較したものでございます。割合を見ますと７０％から８０％で推移しておりますが、特に中学３年生では年々増加しており、ある意味自己肯定感の高まりを示すものと捉えることができるかと思っております。

また、下の折れ線グラフでございますけれども、「将来の夢や目標を持っている」という質問に対する肯定的な回答が、高学年になるほど減少する傾向が見られます。これからの未来を生きていく子どもたちの内面を満たしていくためにも、たくましく生きる力を育む仙台自分づくり教育のさらなる充実が求められているものと考えております。

児童生徒の気がかりな姿というのがございますが、学習の大切さや必要性を感じながらも、学習へ向かう気持ちが湧かなかったり、将来の見通しが立たなかったりと、自らの気持ちの中に相反する部分が生じている傾向が生じていると感じております。

プランの検討委員会の議論におきましても、基礎的な知識を身につけるとともに、生活の中で児童生徒が日々様々なチャレンジを行い、失敗や困難に対しても粘り強く向き合うなど、様々な経験を通して、非認知的な能力を育むことが必要との意見が多く聞か

れたところでございました。

次に、「第３章　仙台市確かな学力育成プラン２０２３における基本的方向」でございます。本プランの目標として、たくましく生きる力を育みながら、確かな学力の要素である基礎的知識・技能の習得、活用する力の育成、主体的な学習態度の形成を目指すことを掲げております。本市では、仙台自分づくり教育に取り組む中で、児童生徒が自ら学ぶ意欲を持ち、人や社会との関わりを大切にしながら、将来の社会的、職業的自立に必要な態度や能力を育むことを狙いとして、たくましく生きる力の育成を目指してまいりました。こうした「たくましく生きる力」の育成と「確かな学力」の育成は相互に作用しながら、それぞれの力を育み合う相関的な関係があるものと考えております。

次に、「第４章　本プランの推進体制」です。本プランに基づいて取り組む事業につきましては、毎年度、施策の取組状況をそれぞれの狙いに沿って検証いたします。その際、各領域の点検・評価の視点や、教育に関する事務の管理及び執行状況の点検及び評価を活用しながら、検証を進めてまいります。また、多様な主体との連携や、社会環境や教育課題の変化を捉えつつ、施策の見直しや追加・修正等を行ってまいります。さらに、市民の皆様の理解と協力が得られるよう、分かりやすく丁寧な情報提供、積極的な発信にも努めてまいります。

資料の裏面をご覧ください。こちらでは、目標達成のために、５年間で取り組む具体的な事業を６つの領域に分けて載せております。

まず、Ａでは、仙台自分づくり教育の充実として、将来の社会的・職業的自立に必要な態度や能力を育むこととしております。

２点目、Ｂでは、確かな指導力の向上として、教員の授業力・指導力向上を図り、児童生徒の基礎的知識・技能の習得や主体的な学習態度の形成などを目指します。

Ｃでは、きめ細かな指導の充実として、学力の向上に向けたきめ細かな指導が展開できる体制を確立して、児童生徒の基礎的知識・技能の習得や主体的な学習態度の形成などを図ります。

Ｄの学習環境等の充実では、教職員が子どもと向き合う時間を確保できる環境の整備、社会教育施設との連携を図り、学習活動の充実に努めてまいります。

Ｅでは、家庭や地域との連携・協働を掲げ、コミュニティ・スクールなどを活用し、家庭や地域との連携・協働を進め、児童生徒の生活習慣、学習習慣の定着を図るものでございます。

最後に、Ｆでは学力、生活・学習状況の的確な把握を示し、仙台市標準学力検査や生活・学習状況調査を基に効果検証を行い、さらなる効果的な学力向上策の検討を行い進めてまいります。説明は以上でございます。

○郡市長　副教育長、ありがとうございました。では、教育委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。では、花渕委員、お願いいたします。

○花渕委員　今、副教育長から説明があったように、「仙台市確かな学力育成プラン２０２３」については、分析も含め、大変すばらしいと思いながら聞いておりました。

令和５年２月、文部科学省の中央教育審議会の中でウェルビーイングについての提言がありました。ウェルビーイングというのは、ご承知のとおり、身体的・精神的・社会的によい状態にあることで、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念と言われております。また、教育とウェルビーイングとの関係につきましては、不登校やいじめ、貧困など、またコロナ禍や社会構造の変化を背景として、子どもたちの抱える困難が多様化、複雑化する中で、一人一人のウェルビーイングの確保が必要である。さらには、子ども、若者の主体的な創造力を育み、一人一人の自己実現を目指すことで、持続可能な社会の創り手としての基盤となる資質・能力を育成することができると述べられておりました。

特に、文部科学省では、子どもたちのウェルビーイングを高めるためには、やはり教師自身のウェルビーイングの確保が重要であると述べており、学校という場所が、先生方一人一人のウェルビーイングを高める場となることが特に重要であると提言されておりました。

仙台市では、このプランの中で６つの領域を掲げ、様々な視点から仙台市の子どもたちの学力向上に取り組んでいるということについて、大変すばらしいと思います。

私は、子どもたちの学力向上については、やはり先ほど述べました先生方のウェルビーイングの確保が必要なのではないかと思います。近年、全国的に、多くのベテランの先生方が定年を迎え退職し、新卒の新進気鋭の若い先生方が増えてきております。これは全国だけではなく、仙台市にとっても同じだと伺っております。

その多くなっている新任層の先生方には、教育センターを中心に悉皆研修のフレッシュ先生研修が１年次、２年次から４年次に行われております。若手の先生方にとってはとても有効な研修であると認識しております。さらに、学習サポートコーディネーター派遣事業、教科指導エキスパート派遣事業等、きめ細かな指導力向上へのサポートにつ

いても行われていると認識しているところでございます。

現在行われているフォーマルな研修について、決して否定するものではありませんが、教育センターや教育指導課が主体となった研修は、若手の先生方にとって公の研修という印象が強くなり、受け身の研修になっているのではないかと危惧しているところです。

そこで、私は若い先生方が自分に足りない点を自ら考え、ベテラン、中堅の先生方に直接学ぶ校内留学を行ってみてはいかがかと考えています。これは、校内に在籍している先生の教室で１日過ごし、その先生の行う学習指導や児童生徒理解はもちろんのこと、給食指導や清掃指導など、教師として必要となるあらゆる面について学ぶ研修です。教科書を教えるだけが教員の仕事ではありません。仙台市内の一つ一つの学校、学級で、子どもたちの発する小さなサインやしぐさを見抜き、指導に生かしていくことができる先生が増えていくことこそが、確かな学力向上につながっていくのではないかと思います。そのことが、不登校対策、いじめの早期発見・早期対応につながっていくのではないかと考えます。

また、若い先生から、先生の授業を見たいと言われたベテラン・中堅の先生方にとっても、直接若い先生方の成長に関わることができるため、モチベーションも高くなり、ひいてはその先生方の指導力向上にもつながっていくのではないでしょうか。

当然、若手の先生が、１日ベテランの先生の教室で過ごすということは、その若手の先生の教室、学級や授業に穴が空くということになります。ですから、教育委員会では、この校内留学を希望する教員のいる学校に対して、非常勤講師等の人的配置が必要になるのではないかと思います。

若い先生方が、フォーマルな研修と、校内留学というインフォーマルな研修の２つの研修を積極的に受け、自らを高めていくことができれば、指導力向上につながり、ひいては子どもの学力向上にもつながっていくものと考えます。

○郡市長　ありがとうございます。受け身の研修ばかりでは良くないのではないかというお話だったかと思います。今行われている研修は、教育公務員として必要な資質や素養を身につけることができるように、また、新しい最新の教育事情を学ぶことができるように、内容を厳選していると聞いているところではございます。

社会の変化は目まぐるしいですし、子どもたちの抱える困難も多様化していて複雑化しているということもあろうかと思います。それらに的確に対応していくためには、これまでの研修に加えて、教員の皆さんたちも生涯にわたって学び続けていく、主体的に

学んでいくということが必要になってくるのだろうと私も思います。

各学校が実態に応じて実施している日常的な教員同士の学び合いが重要であって、既にそのような活動をしている学校もあると聞いているところです。校内留学という言葉を初めて聞きましたけれども、その中で得られるものが多いということもあるようですから、校内留学も含め、教員同士の学び合いの中から多くの経験や知見を吸収してもらい、教員の皆さんにも教壇での実践を通じ、また子どもたちの成長を感じてもらって、教員としてのウェルビーイングを高めていくことにつなげてもらえればよいのではないかと思ってお話を聞かせていただきました。

では次に、川又委員、お願いいたします。

○川又委員　「仙台市確かな学力育成プラン２０２３」の実施のために取り組むべきことについて、２点お話しさせていただきたいと思います。

まず、チャレンジする意欲、積極的な取組の姿勢についての評価ということです。このプランの第２章では、学力をめぐる現状と課題について的確に分析されておりまして、仙台市の児童生徒の学力・生活習慣等の現状がよく理解できるものになっていると思います。その中で、児童生徒の気がかりな姿として、将来の夢や目標を持っていることについての質問に対する回答のグラフを見ると、小学生では肯定的な回答が全学年でほぼ一定の高い数値になっているのに対して、小学６年から中学校では、学年が上がるにつれて肯定的回答が明らかに減少しています。この傾向が、中学生の日々の活動や進路選択の迷い、消極性につながって、さらに高校生にも同様な傾向が現れるようであれば、極めて大きな心配事項であると考えられます。

小学６年、それから中学生になりますと、将来の進学・就職、それ以後の仕事をだんだん考えないといけない時期になります。このような時期に、将来の夢や目標を持っているかということに関して、いろいろ様々な迷いが出るのは当然のことと考えられますけれども、この明らかな違いというのは本当に心配なところであります。

また、資料１ページの一番下にある「検討委員会の議論から」というところでは、基礎的な学力を身につけるとともに、様々なチャレンジを行う機会が重要であるということ、それから失敗や困難に対して粘り強く向き合い、乗り越えた経験が、次への意欲や自信につながるということに関して検討委員会の共通認識を持っていると記載されており、この点に私も大いに共感するところです。結果や成果そのものではなくて、チャレンジする意欲と積極的な取組の姿勢の重要性については、教育の場においてこれまでも

常に言われてきたことであると思いますけれども、それを高く評価するという共通認識について、実際には得られていなかったのではないかと思います。

今後、教育によって社会を健全に発展させていくことを考えますと、チャレンジ意欲や積極的な姿勢を高く評価するという共通認識を醸成していくべきであると考えます。これは、児童生徒への教育のことだけではなく、教員の仕事に対しても同様であると思います。失敗しないことをよしと評価するのではなく、失敗は失敗でマイナスにはせず、チャレンジ意欲や積極的姿勢の重要性を大いにプラス評価するという共通認識を醸成していくような社会的な共通認識や、これを評価するような制度というものが出来上がっていくべきではないかと考えます。

２点目は、確かな学力の育成におけるＩＣＴの積極的な活用と、それに関連する実際的な経験の必要性についてお話しさせていただきたいと思います。高度な情報通信技術（ＩＣＴ）や人工知能（ＡＩ）の技術は、電気、ガス、水道、交通と同じように社会生活の基盤となりますので、教育の場においてもＩＣＴの積極的な活用が図られるべきであると考えます。

現在のＩＣＴは、辞書的な知識に関しては、素早く大量の知識を提供してくれます。しかし、これらの知識がＩＣＴ内にとどまる傾向があり、児童生徒の実際的、具体的な経験や生の体験が減少し、児童生徒の主体的で対話的で深い学びが阻害されてしまうのではないかと危惧いたします。ＩＣＴの積極的な活用に加え、逆にＩＣＴを使わない自然観察、科学的な実験や技術工作、博物館の見学、会社・工場の見学や体験も重視して、さらに児童生徒だけではなく教員の先生方にも実際的、具体的な経験を積んでいただいて、教育の場で深い学びが実現されるようにしていただければと考えております。

○郡市長　ありがとうございました。１点目のお話にコメントさせていただければ、子どもたちのチャレンジする意欲や積極的な姿勢について、本プランの検討委員会でも議論になったとお聞きしているところです。児童生徒の生きる力を育成するために、自己受容や自己肯定感は大切ですし、お話にあったチャレンジ精神、やり抜く力などといった、いわゆる非認知的な能力が重要で、失敗や困難に対しても粘り強く向き合って乗り越えた経験が、次の意欲や自信につながっていくと私も考えます。社会全体でこれらを共有して評価されるといった流れにつながるように、探求的な取組を教育委員会と共に引き続き検討してまいりたいと思います。

２点目のＩＣＴの積極的な活用についてですけれども、１人１台端末を活用して、個

別最適な学び、協働的な学びの充実が図られていると思っています。しかし、これもお話にあったとおり、ＩＣＴの活用はあくまで手段でございます。

一方で、社会生活や多様な生き方をリアルに学ぶ機会も重要と認識しております。子どもたちが、社会の仕組みや、人と人との関わり方について体験して学んでいくことは重要であり、これは、本市が継続して充実を図ってきた「たくましく生きる力」の育成そのものだと考えます。日々の学校教育の中でも学びを深めていくため、今お話のあったことを一緒にやれるように取り組んでもらいたいと思います。

それでは次に、後藤委員、お願いいたします。

○後藤委員　保護者の一人として、子どもたちには健やかに成長し、社会で自立してほしいと願っています。そのための学びであり、大人になって自分の力で生活するために必要な学力を身につけさせたいと考えています。

本プランで示した考え方は、そのような保護者の願いにはかなっており、これからの時代に必要な学びの姿勢として重要だと感じます。その上で、子どもたちが確かな学力を身につけるために大切なのではないかと思うことを２点申し上げます。

まず、１つ目は、初めて学校に行き勉強を始める就学年齢の子どもたちを、勉強嫌いにさせないことです。本来、勉強するということは面白いことです。もちろん向き・不向きもあり、また教科によっても好き嫌いはあると思いますが、知らないことを知る、仕組みを理解する、そしてできないことができるようになるというのは、決して嫌な体験ではない、むしろ楽しい体験です。

小学校低学年の授業は、子どもたちの興味関心を引き出し、考える楽しさや学ぶ喜びを感じさせることが何よりも重要だと考えます。学習の導入期で学ぶ楽しさを経験させる。そして与えられた答えではなく、間違ってもいいので自分で考える習慣を身につけさせる。それがその後の学習にとても役に立ってくると思います。

大切なことは、勉強に苦手意識を持たせないことで、分からないから勉強が嫌いではなく、知らないことを知るのは楽しいと思わせることです。できないことがあってもいいし、知らなくても大丈夫。自由な発想でいいから、とにかく自分自身で考えてみる。それがとても大切であり、そこに正解も間違いもないという視点が必要だと思います。

家庭においては、何げない会話が子どもの学力を育てていると感じます。夕飯や朝食などの食卓での家族の会話が子どもに与える影響はとても大きいです。また、お風呂や寝る前のちょっとした時間に子どもが話す１日の出来事に耳を傾けること。時には絵本

の読み聞かせをすること。そういう会話やコミュニケーションの積み重ねが、自然と子どもの学力を育てていると感じます。

また、子どもたちが学校で授業を受ける際に大切になってくる学習意欲の有無については、日常生活での遊びが大切なのではないかと感じています。遊びといっても、いい加減にふざけるということではなく、ただ流れてくるユーチューブを何となく見るというような受動的な行為でもなく、楽しいと思うことに夢中になって取り組むことです。子どもたちにとって、楽しいと思うことは行動の入り口です。面白いからやる。やりたいから、自分から積極的に行動をする。教科書を読む、問題を解く、先生の話を聞くという行動に意欲を持って積極的に向き合えるかどうかは、子どもたちの学力向上と直接関係してきます。意欲を持って取り組むという行動の根本に、楽しくて夢中になって遊ぶという体験が生きてくるのではないかと思っています。

もう一つ大切なことは、何のために勉強するのか、子どもたちに学習する目的を持たせることです。学習する内容が難しくなるにつれ、その学びが自分の未来に、自分の将来にどう関わってくるのか、何のために勉強するのかを意識することが重要になると思います。何のために勉強しているのか、そこに目的を見いだすことができれば、勉強に対しての取り組み方が違ってきます。子どもたちに主体的な学習をさせたいのであれば、まず学習の目的を理解させることです。

実際の生活や実体験に結びつけて学びを深めることはとても重要です。自分が将来どうなりたいのか、学校の外に目を向けさせ、社会の中で生きていくイメージを多少なりとも持たせることができれば、子どもたちが勉強する目的を知るために役立ちます。仙台自分づくり教育は、そのために大きな役割を果たしていると思います。

子どもたちに、学ぶことは楽しいと思わせることと、勉強する目的を意識させること。この２つのことに注力しながら授業を充実させていけば、確かな学力の充実につながると考えています。

中学生に、どんな授業が面白く、どんな授業がつまらないかということを聞いてみたことがあります。面白い授業は、考える授業、発言する授業、ああなるほどと新しい発見のある授業、討論することなどでした。逆に、面白くないと思う授業は、先生だけが１人で話していて自分たちは黙々とそれを聞いている授業、ひたすら書き写す授業、そして先生の説明が序文・本文・結論ではなく、結論・本文・結論になっている授業とのことでした。そのような授業は、先生が長く話していても、要約すると内容は少なく、

同じことを繰り返していると感じられ、面白くないという意見がありました。私たちが思う以上に、子どもたちは授業の内容をしっかり見て評価していることに驚きました。

教室には様々な子どもたちがいて、学習意欲も学力もまちまちです。理解の速度もおのおので違いますので、一斉に同じことを教え、同じ進度で授業を進めることは困難な部分もあると思います。早く理解する子は、繰り返される内容に飽きてしまい、授業をつまらないと感じてしまうかもしれません。ゆっくり理解する子は、分からないままで置いていかれる、そういった問題があるのも事実だと思います。

その一方で、公立学校での集団授業のよさとして、いろいろな人と一緒に学習することにより、自分とは違う人の考えに触れ、自分では気がつかなかった発想に刺激を受けることもあると思います。自分とは違う個性と関わり、話し合い、互いを理解しようと努力することは、生きていく上で必要なことであり、それを学ぶこともとても大切です。

先生方にとっては個性の違う様々な子どもたちそれぞれが満足する指導を行うのは大変なことかと思いますが、時間をかけて一人一人の子どもと向き合い、たくましく生きる力を育む、学力の充実につながる授業をしていただきたいと願っています。

○郡市長　ありがとうございました。中学生のお話については、そういうこともあるかもしれないと思いながら聞かせていただいたところです。全てのお子さんたちが、学びは楽しいと実感できるようにすることはとても大切だと思います。学校の先生方も、大切なことはしっかり教えたいと思って、ついつい繰り返し説明してしまうこともあるのでしょうが、そういうことではないということを感じました。

学ぶことが楽しいという要素をつくっていくのは、小学校に入ってからではなく、その前の段階からもう既に始まっているのかもしれません。初めて学校という場に行ったときに、これまでのそういう要素が生かされるよう、幼保小連携がスムーズにいくようにすることも重要だろうということでお話を聞かせていただきました。

それから、学ぶ意味・目的をしっかりと意識づけすることも重要です。学びが何かにつながっているということを早いうちから理解させることはとても大切であり、それが主体的な学びにつながっていくと思います。教育委員会には、そうした視点に立って授業を見直し、改善していただくということも含めて、教員の確かな指導力の向上も目指して取り組んでもらわなくてはいけませんし、職場体験などを通して、いろいろ意識して学ぶ意味・目的を小さいうちから子どもたちに感じてもらえるような学習も充実させていく必要があると思って聞かせていただきました。これから、そういう教育に期待し

たいと思います。

次は、山田委員、お願いいたします。

○山田委員　企業人として意見を申し上げたいと思います。日本経済は、１人当たりのＧＤＰがＧ７の中でも最下位、ＯＥＣＤでも２１位という厳しい状況が続いています。企業は人手不足による採用難、物価高騰の中で賃金アップにも対応するという難しいかじ取りを行っています。少子高齢化がますます進む日本では、経済を再生させ、豊かな国にし、分配するということが必須となってきています。それは、今の子どもたちが社会に出たとき、そのような厳しい環境が待っているということ。そして、次世代がたくましく自主的に社会で活躍する人材となることが必要ということでもあります。

義務教育である小学校、中学校の教育は、その基礎をつくる大変重要な時期です。今回のプランの確かな学力を身につけ、たくましく生きる力を育む、将来の社会的・職業的自立に必要な態度や能力を育むという視点はとても大切だと思います。

既に現場では様々な取組が行われており、重なる点もあるかと思いますが、意見を述べさせていただきます。

まず、人間関係のたくましさの育成です。私たち大人も、夜も眠れないほど悩んだり、本やネットでは様々な解決策を模索したり、周りの力を借りたり、そして必ずしも正解ではなくても前へ進むということを日々行っています。自分の子どもにはこんな思いはさせたくないと思うことも真実ですけれども、どんな困難にあっても乗り越える力をつけさせることも必要です。

そのための対策の１つ目は、様々な経験、特に失敗体験をすることです。部活、生徒会、委員会、イベント、文化祭等への参加や、まとめる力の育成、身近な友達との人間関係のトラブルなど自分で解決する力、ストレスをコントロールする力を育む。

２つ目は大人が手を出し過ぎない。子どもは自力で上がってくる力を持っている。保護者と教職員が連携して見守る環境をつくる。あくまで放置ではなく、見守りが必要。

最近、職場体験や授業参観などで子どもたちを見ていて、意外とたくましい、しっかりしていると感じました。保護者と教職員、地域で、子どもたちを温かく見守り、様々なことにチャレンジさせ、失敗を経験し、それをフォローすることでたくましく生きる力を養ってもらいたいと思います。

次に、社会的・職業的自立のためのたくましさの育成です。教育行政は、ともすると経済行政とは一線を画しており、子どもたちが将来活躍する場である経済との連携が弱

いと常々感じています。お金もうけは悪いことではありません。就職先に大手、公務員、安定を求めるのではなくて、自分で起業して切り開く人材が出てくる状況をつくることが日本の活性化につながります。

対策の１つ目は地域企業と教育現場との連携、情報交換を増やすこと。２つ目は教職員の意識改革。まずは先生方が起業や企業経営について知ること。３つ目は企業や先輩職業人である保護者の話を聞く機会を増やすこと。職場体験や子ども体験プラザのさらなる活用やより多くの様々な職種を知ること。４つ目はゲーム感覚での起業や投資で、仮想空間において実際に起業、投資を行い、どれだけ利益を出せたかを競うなどです。最近、ＩＴやＡＩの発展に伴って様々なアプリが開発されています。それらを活用し、仮想空間内で経験することも可能ではないでしょうか。

次に、学力のたくましさの育成です。まず、基礎的学力は重要で、将来、夢や目標が定まったときにそこに進める可能性が高まります。将来の夢や目標を持つ生徒の割合が、学年が上がるほど低下するのはある程度当然で、夢を見る小学生から現実を捉え始める中学生になり、高校受験を前にしてますます分からなくなるという過程は誰しもが経験しています。ただ、基礎的学力を高めることで、将来の進路選択時により多くの選択肢を持つことができることを保護者も教師もしっかり教える必要があります。ただ、全員が行きたい進路を選択できるわけではなく、そこには多分、挫折、妥協という通過点もあるかもしれない。ただ、それも一つの経験であり、そこを乗り越えて社会人として自立するためにも基礎的学力は自分を助けてくれるものであるということを自覚することが重要です。

２点目として、ＩＣＴ、ＡＩの発展により、単なる記憶による学習ではなく、知識を活用し、自分で解を導き出す活用力が今後求められます。企業で重要なのは、問題解決能力です。例えば、「道路に穴が空いた」の解決策として、「穴を埋める」は正解ではない。なぜ穴が空いたのか。大型トラックが多く通るのか、地盤が弱いのか、下に空洞や水があるのかなど、本質的な問題を解決しない限り同じことが起きる。この解決策にたどり着けるかどうかの知識が必要です。

３点目として、今後、国際的に活躍できる知識、学力を身につける必要があります。英語はあくまでも手段であり、海外の人とのコミュニケーションに重要なのは、自分の国についての知識や自分の考えをきちんと説明できる力である。今後、海外企業の進出や研究者も増える可能性があり、教える側も準備が必要です。

４点目に、教える側のたくましさです。現場の先生方の忙しさ、様々なことに幅広く対応する大変さを多く耳にします。働き方改革やＤＸは重要であり、先生方が本来の教えのプロとしての仕事に専念できる環境づくりが大切です。先生方には、体力的にも精神的にもたくましさが求められています。疲弊してたくましさを発揮できない状況を改善し、生徒たちに将来教師になりたいと思わせるような先生が増えることを願っています。

最後に、将来に明るさを見いだせないという社会的な問題については、大人の責任であり、子どもたちが将来に夢を持てる社会をつくらなければいけないと改めて感じています。

○郡市長　まず、山田委員には、ご自身の会社に中学生を受け入れ、職場体験をさせていただいたと聞いております。ありがとうございます。

そして今、たくましさをキーワードに様々な観点からご意見を頂戴しました。本プランにおいて、まさにたくましく生きる力と確かな学力は相互に作用する関係にあると位置づけているところでございます。それらが、それぞれの力を育むために、大変重要であるとうたっております。

ご指摘のあった人間関係のたくましさ、それからまた社会的、職業的自立のためのたくましさ、失敗体験を恐れず、ストレスをコントロールする力というようなお話もありました。これは本市で行っている仙台自分づくり教育の柱にもなっているところでして、様々な方たちと関わり、多様な考え方に触れる機会にもなっていると思っています。

そのほか、学力のたくましさや教える側のたくましさについてもお話がございました。確かに、教員の側が心身ともに疲れていては、子どもたちに学びを提供できる状況ではないだろうと思います。そのためにも、先生方が心身ともに健康で、子どもたちに寄り添うことができるような環境をつくっていくことは、とても大切なことですので、しっかりと努めてまいりたいと思って聞きました。

では、庄司委員、お願いいたします。

○庄司委員　学力を支えているものは何なのか、それを意識すること、高めることができれば、集中できるのではないかと考えました。落ち着いて授業を受けられる学級、学校に行くことが楽しい。これは、勉強に限らず、学級での居心地が大きく関係していると思います。

例えば、校内暴力があり、通常の授業ができない場合には、学力向上よりも一日も早

く落ち着いて授業ができるようにしなければなりません。また、低学力の子どもたちは授業についていけなくなり、学校がつまらなくなってしまっていることもあります。勉強は積み重ねです。どこでつまずいているのか、丁寧なケアが必要です。

発達段階に即して、子どもが主体的に学ぶ授業をつくっていくことが大切だと考えます。単純に、家庭内での学習時間が少ないということもありますが、中には原因が家庭環境である場合など、子どもたちにはどうにもできないこともあります。

勉強ができない、分からないということで、自己肯定感が低いというのも大きな問題だと思います。勉強ができるようになると、自己肯定感は上がるのでしょうか。勉強だけではありませんが、先生やお友達から認められるという小さなこと一つ一つが自信につながります。人はやはり褒められると悪い気はしないですし、褒められることによって、さらに頑張ろう、自分を高めていこうという気持ちになると思います。

学力の向上には、子どもたちが自分の考えを安心して発表できる、友達の意見をきちんと受け止めるなど、学級が受容的、共感的な雰囲気であること。そういうところも学びの質に大きな関係があると思います。学級が一つになれる行事も、縮小されることなく、これまでどおりに開催されてほしいと思います。子どもたちには、体験をたくさんさせてほしいと思います。

次に、読書です。本を読むことで、言葉を学びます。また、感性を磨き、表現力を高め、豊かな創造力、探究心や、よりよく生きる態度等を身につけていきます。小さなうちから本に触れた体験が、大人になっても続けている割合に大きな差が出ているようです。学校、家庭における読書習慣は、これまで以上に推進していくことが大切だと考えます。また、読み聞かせ等、幼児期からの読書の重要性についても、もっと力を入れて周知していく必要があると思います。

また、本物に触れる機会、美しいものや優れたもの、芸術的なもの、地域の伝統文化に触れること。こういった機会をつくっていくことが大事だと思います。

次に、早寝、早起き、朝ご飯などの基本的な生活習慣です。生活習慣は、食べること以外でも、生まれたときからの積み重ねです。就学前から、子どもたちの心身の成長にとって基本的な生活習慣が重要だと思います。家庭や地域を巻き込んでの触れ合いや体験会、機会づくりもさらに必要だと思います。子どもたちの体を動かす遊びが、これまで以上に活発に行われるようにする必要があります。これも、就学前の幼児期から運動に親しむ習慣づくりが大切だと思います。運動クラブや部活動では、子どもたちが感動

や達成感を得て有意義な学校生活が送れるようサポートしていかなければならないと思います。

同時に、命の大切さも、学校だけではなく地域連携で、他者と共によりよく生きようとする意識や命を大切にする心を育むため取り組んでいかなければならないと思います。

子どもたちがたくさん体験や経験をすることで、他者を知り、認め合うことで、落ち着いた学級をつくることにもつながっていくと思います。誰ひとり取り残されない学校があって、学力も伸びていくと思います。

○郡市長　ありがとうございました。まず、学級経営についてのお話に触れさせていただきます。教育委員会では、教員の確かな指導力の向上に向けて、教育センターでの研修を行っていることを先ほども申し上げたところでございます。学力サポートコーディネーターの派遣など、授業づくりや学級経営についても様々な施策を展開して、子どもたち一人一人に寄り添った指導が行えるよう、教員の資質向上に努めていると理解しているところでございます。

それから、読書についてお話がありました。子どもたちの感性を磨いて表現力や創造力、探究心を豊かにするためには、読書習慣がやはり大切だと思います。今年度、教育委員会では「仙台市子ども読書活動推進計画」の改定を行っているところでございまして、子どもたちの読書環境の充実のための取組を進めていくものと認識をしております。書物に触れて、さらにはその他の文化・芸術など、子どもたちが直接いいもの、本物に触れる機会を一層つくっていくよう、教育委員会と共に努めてまいります。

それから、早寝、早起き、朝ご飯といった健康的な生活習慣が大切だというお話がございました。今改定作業が進められている「仙台市健やかな体の育成プラン」においても、重要な視点だと思っているところでございまして、健やかな育ちに寄与する施策の展開に期待してまいりたいと思います。

では、長谷川委員、よろしくお願いいたします。

○長谷川委員　私からは、教育心理学の観点から４つほどコメントさせていただきます。

まず、学力について、文部科学省の大方針を基に、分かりやすく、また地域の特性に合わせてプランをまとめ上げていると感じました。確かな学力を、特に主体的学習態度、基礎的知識・技能、活用する力の往還から、つまり相互に関係するという観点から捉えている点も、とてもよいまとめだと感じています。そもそも知識というのは、断片的なものでも丸暗記するものでもなく、活用されて初めて意味を持つということを再確認し

たいと思います。また、知識は体験と共に身につくものです。例えば、３分の１という概念があるときに、生成ＡＩでしたら、それは単に記号でしかありません。けれども、人間にとっては、ケーキを３等分する、３人で分け合うというような意味を持つものです。そこがいわゆる生成ＡＩの解と人間の理解の違いだと思います。

次に、指導についてです。近年、子どもの主体性、能動性を尊重した指導を行うようにということが強調されていますが、これは言うのは簡単ですが、教える側としては非常に難しいもので、つまり教師の技量の向上が重要になります。ただ、それを教師個人の問題にしてしまうのは酷だと思います。そのためには、制度面としてもサポートが必要です。少人数学級の推進、非常勤講師に対しても研修を行う、チームティーチング、専門家の招聘など、制度面でも一層のサポートが必要ではないかと思います。

第３に、多様性です。これまでの日本では、形式的な平等、つまり同じ内容を教えること、横並びをよしとするということが大切だと思われていましたが、今後はもっと個性に応じた対応へと変化すべきだと思います。より一層、人間の多様性に対応していく必要があります。これは、グローバル化が進む現代社会において必須ともいえる国際化について考えていく必要を示唆するものでもあります。

最後に、心の発達についてです。人生の中で、発達の節目と言われる時期はたくさんあります。その中の一つが、９歳、１０歳ぐらい、つまり小学校中学年ぐらいの成長の時期です。具体的には、客観的に物事を見ることができるようになり、批判的に考察できる、長期的な視点を持てる、他者などとも比較できるということです。これは思考力が高まったということですが、これと関係して、数値の上では自己肯定感が低くなります。客観的に、より正確に物事を理解できるようになるからこそ、そういう面もあります。また、日本には肯定感や誇らしさを表出しないという謙遜の文化ルールもあるため、諸外国と比較しても数値の上では自己肯定感は高くはありません。だだし、集計結果に振り回されて、自己肯定感得点を高めなくてはと思うのは、調査の趣旨から外れます。

ここで私が重要だと思うのは、自己肯定感を個人の心の問題というふうに閉じた現象として捉えるべきではないということです。他者とのつながりの中で捉えたほうがよいと思います。実際、道具的な、あるいは情緒的なソーシャルサポートを受けている子ども、あるいは受けていると感じている子どもは、自己肯定感が高いという調査結果もあります。自己肯定感は、複数の意味が含まれる概念ですけれども、子どもの成長においては、その肯定感の中でも特に信頼感や安心感を重視するとよいのではないかと考えて

おります。

○郡市長　ありがとうございました。いろいろお話がありましたけれども、最後の自己肯定感のところについて、考えさせられることがあると思いながらお聞きいたしました。長谷川委員も指摘されたように、自分は信頼されている、ここは安全だな、安心だなという気持ちの中で、こういうものは生まれてくるのかもしれないと捉えたところです。つまりは、家庭や地域の皆さま、教員など、大人との関わりの中で、子どもたちがしっかり認められて、支えられているという気持ちを持つことが、子どもたちの成長にとってはとても重要な、重いものがあるというお話だったと受け止めさせていただきました。

そのほか、多様性に対応していく必要があるというお話がありまして、この点についても非常に興味深く聞かせていただいたところです。また、学んだことをその後の生活や社会の中で生かそうとする意欲を生み出していくためにも、主体的な学習態度が重要であるというお話だったかと思います。

皆様方から様々なご意見を頂戴いたしましたけれども、ここからは、今までの皆様方のご意見も踏まえた上で、さらにディスカッションをしていただければと思います。何か委員の方々からありますでしょうか。では、花渕委員、お願いします。

○花渕委員　今、委員の皆さまの話を聞いていて、学力を内側から見るのか、外側から見るのかによって、大分違ってくると感じました。保護者目線で見る場合、それから企業の方の目線で見る場合、大学の先生の目線で見る場合など、学校の外の方から見る学力と、学校や教育委員会の中から見る学力は、もしかすると違っているのかもしれないと感じました。

学力と一言で言ってしまうと、いわゆる学んだ力であり、知識・理解・技能など、測定しやすい力は数値として現れやすいと思いますが、思考、判断とか関心、意欲、態度など、学ぼうとする力はなかなか数値には現れてこない。また、それを測ろうとするには、先ほど各委員の話にもありましたけれども、先生方の力量がかなり必要になる。つまり数値としてなかなか現れてこない学力をどう見ていくのか。もしかすると、学校を卒業したときでは出てこない学力で、社会に出ないと見えてこない学力だったりするかもしれません。教育局では学校教育の中で完結して結果を出したいというのは当然分かりますが、そうではない部分もあるというところも視点の一つとして入れてもいいのではないかと感じたところです。

○郡市長　ありがとうございます。ほかにありますでしょうか。先ほど、教師の持つ力に

委ねられるのは余りにも酷だという話もございました。そして、確かな学力とは一体何なのかということについても、今、花渕委員からご指摘があったところでして、今日は大変深い話を委員の皆様方にしていただいているという印象でございます。山田委員、いかがでしょうか。

○山田委員　私は、企業目線でお話をさせていただきました。今、小中学校対象でこういう計画を立てているのは、本当にすばらしいと思っていて、このとおりたくましく生きる力をつけて社会に出るようにすべきだとは思っています。企業の側も、最近Ｚ世代になってから、受け入れる子どもたちが少しずつ変わってきていたりもしますし、昔とは考え方も少し違うようになってきています。企業では、国の働き方改革や様々なハラスメントに対する対応なども言われるので、そういうところについてかなり気をつけながら、新入社員を育てなければならないのは確かです。社会全体としてももちろん育てていかなければならないのですが、そのときに子どもたちを見ていると、小中高ぐらいで培われてくる基礎的な力が社会に出てから伸びていくというところにすごく効いてきているような気がします。社会に出てひとり立ちするところまで持っていくというのが教育なので、そこを見据えた教育をしていかなければならないと思っています。それは難しいことですけれども、ぜひお願いします。

○郡市長　ありがとうございます。企業から見た学び、学力についてのお話もあったわけですけれども、教育委員会として、副教育長、いかがでしょうか。今までのお話の中で感じたことをお話しいただければと思います。

○岩城副教育長　企業人の山田委員からの意見の中で、社会的、職業的に自立するということの一つとして、「公務員、安定を求めるのではなく」というお話があったかと思いますが、公務員、教育公務員としての我々としては、やや耳が痛いところもございました。確かに身分保障などはありますけれども、これだけ社会も変化している中で、課題も複雑化しており、行政としても取り組む範囲は広がっていますので、市役所または教育委員会としてこうやれば答えはこうなるというのは、なかなかない時代かと思っています。日々、学校現場とも話をしつつ、児童生徒の状況を踏まえ、悩みながらチャレンジしているという状況だと思っています。今回のプランの中で一つの取組として、宮城教育大学にも関わっていただき、授業力レベルアップ研修を行っており、何人かの教育委員にも、教育センターやオンラインで改善の状況を見ていただきました。後藤委員からもお話がありましたが、児童生徒が分かった、これをもっと学びたい、深めたいとい

った学びの楽しさを子どもたちが感じて授業に取り組む、日々学んでいくことが大事だと思っています。

次に、学級経営ですが、授業一つ一つはもちろん、学級全体の居心地を良くすることをいかに進めていくかも大事だと感じております。そういう意味では、日々のＯＪＴも含めて校内での研修も、これは学校現場に限らず、我々の教育委員会の事務職もそうでございますけれども、それぞれ現場での日々での仕事を通して、どのようにそういった資質を向上させていくか、またはそういった体制のサポートも大事だと思っております。

また、ＩＣＴ活用は当然大事なこととして進めておりますけれども、リアルな体験などはその年齢のときにしか感じられないものがあり、体験したことの感じ方はやはり違うと思います。そういったものをより多くの子どもたちに感じてもらい、失敗も大いによかろうという態度で接することは大事だと思って聞きました。

多くの児童生徒は１０年もたてば社会に出ていきます。そこでどういう力を発揮できるかというのを見据えて、学校での教育を進めていく必要があります。それは、一朝一夕には確かに難しい話でございますし、今すぐ結果を求めることも難しいかと思いますけれども、子どもたちがどういう大人になって、どういう可能性にチャレンジできるかを考えながら取り組む必要があるということを、本日、委員の皆さまのお話、市長のお話を聞いて、感じた次第でございます。

○郡市長　ありがとうございます。本市の取組の方向性について、理念も含めてお話いただいたものと思います。地域や家庭から見た今回のテーマについて、後藤委員、いかがでしょうか。

○後藤委員　教室の中で朝ご飯を食べていない子どもが、どうしても授業に集中できないというのはあります。皆さんからも意見が出ていましたが、やはり早寝、早起き、朝ご飯が大切であったり、居心地のいい教室が大切であったり、信頼感や安心感という気持ちの安定も大切であったりという、一つ一つのことがばらばらではなくて、全て重なって、全て大切だと思います。「健やか」や「たくましさ」、そのキーワードが学力を伸ばすためには必要なのではないかと感じています。家庭でも努力はしますけれども、熱心な家庭がいる一方で、子どもに目が向けられない家庭も中にはある。そういうところを学校でどの程度すくい取って安心させてあげられるかというところが、難しいとは思いますが、先生方のコミュニケーションにかかってくるのだと思います。

○郡市長　ありがとうございます。庄司委員、いかがですか。

○庄司委員　多分、学校の環境は、今も昔もほとんど変わってはいないと私は思っています。今は情報量が多くなって、例えば自分が学校に行っていたときはスマホもなかったですし、そういう意味では何かをお話しする機会がすごく減っているのではないでしょうか。コミュニケーションがなかなか取れないという、家でもあまり話さないで、それこそご飯ができたというのも親子でＬＩＮＥでやり取りしているなどというのもよく聞きます。地域でいろいろなことをやっていて、何かお話をするというところが、一番簡単に始められることなのではないかとよく感じます。あの方が少し苦手といった先入観がある場合など、大人も話すことがおっくうになることもあるかと思います。子どもはそういうのを見ているので、まずは大人がお手本を見せるというところから始めるべきだと思います。元気な大人が仙台市にいっぱい増えれば、子どもも自然と元気が出てくるのではないかと思います。

○郡市長　ありがとうございました。川又委員はいかがでしょうか。

○川又委員　ここ１～２年間で、いろいろな先生方の授業の工夫を拝見して私が思ったことは、本当にすばらしい授業をされているということです。英語も数学も非常に分かりやすい授業をしていましたが、多分そういう先生方は特別に選ばれた方々ではないかと思いまして、私としてはもっと普通の先生方の発表の姿を見たいと思い始めました。例えば数学で言えば、大学を卒業した人はこういうふうに理解すれば分かりやすいけれども、教えるときにはまた別の教え方があるかもしれません。そういうときに失敗した事例なども教えていただきたいと思います。かつて失敗した先生がそれをうまく成功に結びつけたという事例がたくさんあると思いますので、そういう事例も発表会のときに紹介していただければと思いました。

○郡市長　ありがとうございます。いいところばかりではなくて、少し課題を抱えているところもご覧になりたいということだったかもしれません。おしなべて教育力をアップしていきたいと思っているわけですけれども、それも状況によって難しいところもあるだろうと思います。ですから、教職員がゆとりを持って本来の子どもたちの教育に当たることができるような環境をつくっていくことについて、私ももっともっと努力しなくてはいけないと思います。

　それでは、長谷川委員、いかがでしょうか。

○長谷川委員　花渕委員から、立場によって同じ学力でも見方が違うということを伺いましたけれども、本当に私もそう思いますし、そうあるべきではないかと思います。とい

うのは、学校、学力、生活というのは、単純に整理できるものではなくて、本来非常に複雑で多層的なものだと思います。最近は５分で何々を分かる方法や、１０時間で何々学を理解しようといった、短い時間でパッと分かる簡便さが推奨されていますけれども、現実は、複雑なものを複雑に理解していくしかないところがあると思います。本来、子どもたちも子どもを取り巻く環境も複雑で多様です。多少はみ出ていたり、特殊だったり、個性が強かったり、平均的ではないという、その様々な個性を認め合ったり受け入れる、そういう安心できる場が重要なのではないかと考えております。

○郡市長　ありがとうございます。花渕委員からの意見について言及されながらご意見をいただきました。仙台市内のお子さんたちには、基礎的な知識・技能について、しっかりと伝えていかなくてはならない、育んでいかなくてはならないと私としては思っているところです。ここのところについて、どのように取り組むかということをお話ししていただいたものだと思います。確かな学力は多種多様であり、それをどう評価していくのかというのは、まさに教育現場で相当頭を悩ませながらやっていかなくてはならないことだろうと思います。このお話を聞いて、花渕委員、いかがでしょうか。

○花渕委員　評価基準というときに、その基になる基準(もとじゅん)と規準(のりじゅん)という２つがあると思います。基準（もとじゅん）による評価というのは例えばテストで何点以上、この学習で何点を取った、何点だからＡ評価、何点だからＢ評価と、判断することができます。一方、規準（のりじゅん）とは、例えば割り算の学習で、「割り算のことについて何々ができるようになった」などというものですが、この規準を設定するのもなかなか難しいですし、それを判断するのが非常に難しい。「割り算の３桁割る２桁の割り算ができるようになった」ということについて、何をもってできるようになったか判断するのは非常に難しい。指導と評価の一体化と昔から言われていますが、指導だけを一生懸命やっても、実際に行った授業をどう評価できたのかという部分もないといけない。そうでないと、次の指導に生きていかないと思います。市長が先ほどおっしゃった基礎的な学力、基本的な学習内容を身につけるという意味でも、特にそこの部分が大事だと思っております。

○郡市長　ありがとうございます。学校現場の視点からご意見をいただきました。いずれにしろ、子どもたちには健やかに、たくましく生きる力、そして基礎的なところも含めて確かな学力を育んでいくというのが求められるわけですから、今日いただきました様々なご意見も今後の施策の中で生かせるように、教育委員会と共に取り組んでまいり

たいと思います。

大変刺激を受けた今回の総合教育会議だったと思います。いろいろなお話をいただきましたことに心から感謝申し上げて、本日の協議を終了します。次第の３番、その他に移らせていただいてよろしいでしょうか。

３　その他

○郡市長　では、事務局から連絡事項などがあればお願いいたします。

○事務局　次回の会議についてでございますが、改めて調整を行った上でご連絡いたしますので、よろしくお願いいたします。

４　閉　　会

○郡市長　以上をもちまして、第２回の総合教育会議を終了いたします。教育委員の皆様、大変お疲れさまでございました。ありがとうございました。